

Cyprus は果してキプロス島か

——シェイクスピアと典拠——

山田直道

1

ニコル⁽¹⁾も指摘しているように、一般的に^{ソース・スタディ}素材研究のもつ意義の一つは、それによって劇作家の芸術の在り方を探求できることであり、劇作の方法をある程度明らかにすることができることであろう。シェイクスピアの場合も、大部分の作品の背後には、作者が下敷にしたと考えられる幾種類もの典拠が存在しており⁽²⁾、それとの比較を通して作家の作劇術、ひいては生成された作品に対する作者の責任の負い方が少なからず明らかとなるだろう⁽³⁾。即ち、演劇の原理的要素を内包する劇の成立過程を、ソース→作者（シェイクスピア）→劇作品→劇場（俳優）→観客と指定するならば、ソースとの比較は図式の前半にあたる作品の生成過程をみる作業となり、作者に密着して作劇の跡を辿る作業ということになる。

だが、作品とソースの比較と一口に言ってもそれ程単純ではない。第一に、比較を真の意味での比較にするためには、まず、その種本をシェイクスピアが直接使用したことが明白である必要がある。そしてそれが作品の全篇に亘って比較されて初めて作者の作品全体に対する明示的態度が浮かび上がってくると思われるのである。従って、作品とソースとの絶対的かつ全篇的な比較を可能にするこの二つの条件を充たすものとして、主典拠⁽⁴⁾の重みと形態的に劇を構成する最小単位としての対話関係をそれぞれ考えたいのである。

そこで、主典拠の意味をまず考えてみよう⁽⁵⁾。シェイクスピアは主典拠に作品の枠組を求め、それを基礎にして劇を構成する。そして次に彼はそれを離れて他のソースに材料を求めるか、或は純然たる創作部分を加えるかのいずれかとなる。そのとき主典拠は、シェイクスピアが他の素材を用いようとして離れるときにどのような意味をもつであろうか。主典拠の「主」の意味を改めて問い直してみたいのである。別様に

言えば、劇作家は、メインソースを逸脱するときに何らかの動機を感じているだろうかということになる。即ち、劇作家は主典拠を離れて他のソースに依存するか創造部分を付加するかのどちらかになるわけだが、そのとき何の動機もなく離れることがあるだろうか。それは、劇作家の場合、いわゆる芸術家の感ずるような創造的動機と考えられ、従って、劇作家が主典拠を離れるのは彼が内的創造的動機を主典拠内で充足できないためであると考えの方が自然であろう。シェイクスピアが主典拠から離れたとき、即ちメインソース内に作品と一致する内容を発見できない場合、彼の離脱の結果は、彼の内的創造精神の発動によるものとみなすことが可能になり、従って我々に残された課題は、その離脱の結果を分析しその解釈を通じて、シェイクスピアが主典拠を逸脱した理由を探求することになるのである。従って、シェイクスピアの創作意図を究明しようとするとき、彼が主典拠を離れる瞬間は離れた結果同様重要であり、離れてどの素材に向ったかは、この場合一応別問題となるのである。

次に対話関係について考えてみよう。一般的に、戯曲は、通常対話、場所の指定、人物の登退場及び動作の指示が原型となって成り立っているが、このことから、登場人物間の対話というものを、形態的に劇を構成する最小単位の要素として考えることができるであろう⁽⁶⁾。そして、シェイクスピア劇に、台詞及びその受け渡しである対話、その持続したものである人物関係のない劇はないのである。従って、対話形式を形態的に全篇に亘り調査し、そこから次に生まれてくる人物関係の内容を吟味する手順へと進むことになるだろう。そしてそれが人物間の人間関係を規定する材料となるのである。一人物が舞台上で最初から最後まで台詞を述べなければ他の登場人物と人間関係を結ぶことはできない。もし仮にその人物が他の人物に話しかけ、返答があれば対話関係が生まれ、更にその関係が進展することにより中味としての人間関係が生まれてくることになる。又、二人の登場人物間の対話関係はそれ自身増大してゆく。即ち一人の人物が複数の他の人物と対話関係を維持し、それが人間関係を規定するならば、一人物が複式人間関係をもつことになるからである。このように、舞台上の人物は恰も自分の意志で人間関係を増殖させるように見えるが、この人間関係を支える対話関係も、又対話関係を支える台詞も、当然のことながらシェイクスピアによって創り出されたものであり、従って劇作家は、台詞、対話関係、人間関係の全てに責任を負っているといえよう。仮にシェイクスピアが舞台上にある人物を創造し、その人物と他の人物との間に対話関係を結ばせるならば、そこから生まれる人間関係はシェイクスピアの創造となり、又もしもシェイクスピアが主典拠にない人物関係を創造すればそれも又シェイクスピアの創造になる。従って、シェイクスピアが舞台上に、歴史

上であれ、架空であれ人物を創造する意図は、創造された人物との人間関係の全てがシェイクスピアの創造となるために、人間関係創造の意図に含まれ、あとはその意図を探求することが課題として残るだけとなる。即ちある人物をなぜ創造したかを問うよりも、ある人物を創造して他の人物と人間関係を結ばせるとき、その関係を創造した理由を問うことの方がより本質的であるというわけである。従って、対話関係は戯曲の原理に立脚し、形態的に劇を構成する最小単位の要素であると同時に、作者の劇作意図を基本的に担うものであると考えられるのであり、作品と素材の絶対的かつ全篇的比較を行うために、作品内の対話関係と主典拠内の人物関係とをまず形態的に比較して主典拠にない対話関係を抽出し、次にその織りなす人物関係の内容を、作者シェイクスピアの創作意図をしのばせた材料として考察の対象としたいのである。そこでこの方法に従い、シェイクスピアの四大悲劇の一つである *Othello*⁽⁷⁾ と、その主典拠であるイタリアの小説家・詩人 Giraldi Cinthio (1504-73) が 1565 年に世に出した *The Hecatommithi* の第三巻第七話との比較考量を行い、オセローの悲劇を作者はどのように創作しようとしているのかを考えてみたい。

2

シェイクスピアとチンティオの相違点を洗い出す前に、ひと通り『百物語』の粗筋を追ってみることにしよう⁽⁸⁾。

両親の必死の反対にも拘らず Moor と結婚した Disdemona は、キプロス駐屯軍の異動で大公により指揮官に任命された夫ムーアに同行し、平穏な航海の末、無事キプロスに到着する。ムーアのお気に入り、邪悪な心を立派な外見で隠した旗手 (Ensign) も妻とともに同道する。一方部隊の Captain もムーアに深く愛されている。ある時、旗手はディスデモナに横恋慕したが無視され逆に彼女を恨むようになり、冷淡なのは彼女がキャプテンに好意を抱いているからだと考え、キャプテン殺害の機会と、ムーアの愛情を彼女から引き離すための時機の到来とを待っている。たまたまキャプテンが衛兵の一人を剣で叩く刃傷事件がおこり、彼はそのままムーアによって免職となったが、その知らせに深く悲しんだディスデモナが執拗に復職を迫るので止むなく認めてしまいそうだと Moor が旗手に相談したところ、旗手はキャプテン復職をディスデモナが熱心に頼むのにはわけがあると言い、ムーアを憂鬱な気分させる。ムーアは更に教えるよう旗手に迫るが、旗手は気の進ま

ぬことだが真実を述べると言っ、キャプテンがムーアの不興を買ったために彼が家を訪れなくなり、彼と会う楽しみがなくなったから彼女は悲しんでいるなどと言う。旗手の言葉を全く真実であると信じて疑わないムーアは、更に聞き出そうとして旗手を脅し、その言葉を自分の目で確かめたい、それができないなら妻を中傷するその舌を抜くとまで言う。そこで旗手は、ディスデモナが家を訪問する際にしばしば持参する結婚記念の刺繍入りハンカチに目を付け、自分の娘を抱いているディスデモナから素早く盗みキャプテンの寝台の枕許に置く。しかし不審に思ったキャプテンがそれをディスデモナに返そうとするができず、かえってムーアの疑心を深めるだけに終る。事件を聞いた旗手は自分とキャプテンの話し合いをムーアに目撃させ、ハンカチはムーアの不在中にディスデモナからもらったものとのキャプテンの言葉を旗手はムーアに伝える。そこでムーアはディスデモナがハンカチを紛失していることを直接確認し、遂に彼は妻とキャプテンの殺害を考えるに至る。更にムーアはキャプテンの手許にハンカチがあるのを目撃させてくれるよう旗手に依頼し、頼まれた旗手はキャプテンの妻が窓辺でそのハンカチの刺繍を真似て制作している姿をムーアに見せムーアは最終的に妻の罪を確信するに至る。そこでムーアはキャプテン暗殺を旗手に説得し、しぶしぶ承諾した旗手は、暗夜キャプテンを襲い右足に重傷を負わせるが、この知らせがディスデモナの耳に入ると彼女は悲しんで更に夫の疑心を深めることになる。彼は旗手を捜して妻の狂乱状態を伝え、二人で妻の暗殺方法を研究するが、結局、砂詰ストッキングで彼女を殴打し、ベッドに移した後、亀裂の入った古天井を引き落として事故死に見せかけることに成功する。しかしムーアはその後理性を失くした者のようになり、悲しみの余り家中を索し回り、人生の全ての喜びを失ったのは旗手が原因だと考え、旗手に憎悪を抱き免職し追放したので、両者の間に敵意が生まれ、ヴェニスに帰った旗手はキャプテンを唆して、闇討ちのかどでムーアを告発しムーアは逮捕されヴェニスへ連行されたが、罪を否定し自白もしなかったため死を免れたものの、釈放後ディスデモナの親族に殺される。一方、旗手も別件での拷問のために身体を痛め、その後悲惨な死を遂げる——以上が旗手の死後、その妻が語ったものである。

チンティオの原話の粗筋はこのようなものだが、末尾の一覧表⁽⁹⁾にみられるように、そこに読み取れる人物間の関係と、シェイクスピアの作品に登場する人物間の関係を全篇に亘って比較すると⁽¹⁰⁾、まず創造された人物の Roderigo, Montano, Lodovico, Gratiano と他の登場人物との人間関係がつくられる場合、Oth.-Emil. 関係のように、

チンティオ、シェイクスピアともに人物としては登場するが、チンティオにはみられない人間関係が創造される場合、及び Iago-Des. 関係のように、チンティオ、シェイクスピアともに人間関係が存在するが、その関係の内容に相違がみられる場合、とがある。そこでチンティオとは異りシェイクスピアが創り出したたり変更を加えたりした人物関係を筋書の進展に従って整理すると、(i) 創造された Rod.-Iago 関係は、「オセローを憎むイアゴの悪の動機の明示、オセローとデズデモウナの秘密結婚の発覚」を構成し、創造された Duke-Bra., Bra.-Oth., Des.-Duke 及び、変更された Des.-Bra., Duke-Oth. 関係は「オセローとデズデモウナの結婚、及び、トルコ艦隊来襲に備えてのキプロス行」を構成し、(ii) 創造された Mon.-Iago, Mon.-Cas. Mon.-Oth., Iago-Rod., Cas.-Rod. 関係、及び変更された Iago-Cas. 関係は、「暴風雨、トルコ艦隊全滅、オセローキプロス上陸、キャシオー免職事件」を構成し、(iii) 変更された Iago-Cas., Iago-Emil., Cas.-Des. 関係は、「キャシオー復職運動」を構成し、(iv) 変更された Iago-Oth., Oth.-Des., Iago-Emil., Cas.-Emil. 関係は、「ハンカチ紛失事件」を構成し、(v) 創造された Iago-Rod. 関係は、「キャシオー暗殺計画実行」を構成し、(vi) 創造された Oth.-Emil., Lod.-Oth., Lod.-Iago, Gra.-Iago, Gra.-Oth. 関係、及び変更された Iago-Emil. 関係は、「デズデモウナの死、イアゴの陰謀発覚、オセローの死」を構成していることがわかる。そこで (i)~(vi) についてそれぞれ吟味してみよう。

(i) 劇は、Rod.-Iago の創造対話関係 (1) で幕をあける。この関係で作者は、自分を副官に登用しなかったオセローを憎み⁽¹¹⁾、かつ、主人に対する忠義な部下は偽りの姿 “I am not what I am.” という自己規定を行い、又ロダリーゴを誘ってブラバンショを怒らせ (11)~(15)、オセローとデズデモウナの秘密結婚を暴露した後、ブラバンショに姿を見られないよう⁽¹²⁾オセローの許へ戻るイアゴを創造する (17)。チンティオの旗手もムーアに対し邪悪な性格を忠義で包み隠している点は同様だが、前述した通りオセローとデズデモウナの結婚が父親も知らなかった秘密結婚であるというのはシェイクスピアの創造であって、そこから娘の不在を知り “O, she deceives me/Past thought!” (24) と嘆くブラバンショを創造している。更にシェイクスピアはたとえ現実におこった事件であっても⁽¹³⁾チンティオにみえないキプロス戦争を挿入し、イアゴの口を通してオセローの軍人としての能力の発揮をヴェニスが大いに期待していることを描き (17)、キャシオの口を通して；オセローを迎えるため三組の捜索隊が元老院から繰り出される程彼が極めて必要とされていることを創造する (35) のである。チンティオでは、キプロス駐屯軍の人事異動でムーア

が指揮官に任命されたとあるが、シェイクスピアはトルコ艦隊がキプロスを攻撃するという緊急事態をつくり出して、それ故にオセローが元老院に呼び出されるということ創造している。その意図は一体何であろうか。ところで、オセローを捜しにロダリーゴを案内役として夜の町に出たブラバンシヨ―達はオセローと出会いすぐに刀を抜こうとしてオセローに制止される(44)。その時、イアゴ―はロダリーゴと対決する(43)が、彼はその前にロダリーゴの悪口に立腹し殺すところだったと述べてオセローに自らの忠実を示そうとする(34)わけだが、そのイアゴ―は、ロダリーゴと共謀して Brabantio-Othello の対決を引きおこしたわけであるから、それは相通じていることをオセローに感知されまいとするロダリーゴへの敵対行動と言えるであろう。このようにシェイクスピアは、チンティオを変更して、オセローとデズデモウナの結婚を父親ブラバンシヨ―が知らないことにし、チンティオにない Iago-Rod. 関係によって Brabantio-Othello の敵対関係を創造し、元老院での裁きへと創造を継続してゆくのである。その場面で、娘が父親を騙すとは夢想もしないブラバンシヨ―は、デズデモウナとオセローが相思相愛の仲であるを知って悲嘆にくれつつその結婚を結局のところ認める(83)のだが、最後にオセローに向い、“Look to her, Moor, if thou hast eyes to see: She has deceived her father, and may thee.”(100)と述べていずれはオセローの身にもと警告を発する。シェイクスピアはチンティオを改変して最終的にデズデモウナに欺かれるかもしれないという後々の筋書への伏線を考案し、果してオセローの耳に注がれるイアゴ―の言葉“*She did deceive her father, marrying you,/And when she seemed to shake, and fear your looks,/She loved them most.*”(209)へと創作を続けて行くことになる。従って、秘密結婚とはブラバンシヨ―に対して秘密となるようにシェイクスピアはチンティオを変更し、それによって父親の目を欺いたデズデモウナがオセローをも次にというブラバンシヨ―の警告を創造することを意図したと言えようし、究極的には、それによってイアゴ―の毒がオセローに効果をあらわすよう意図したと言えるだろう。

次に Duke (大公) と他の人物との創造対話関係を考察してみよう。シェイクスピアは前に述べた通り、チンティオを離れてトルコ艦隊のキプロス来襲を創造し、そのために緊急に元老院での会議を招集するヴェニス大公と、三組の捜索隊にみえる程ヴェニスが必要とするオセローを創り出し、オセローとブラバンシヨ―が登場すると、ブラバンシヨ―には気付かずに、オセローに向っていきなり、“*Valiant Othello, we must straight employ you/Against the general enemy Ottoman.*”(61)と出陣を要請し、デズデモウナとの結婚に至るオセローの話に、“*I think this tale would win*

my daughter.” (78) と賛意を表明してオセロー寄りの姿勢を持ち、キプロスに揃って同行したいと願うデズデモウナとオセローに、“Be it as you shall privately determine,/Either for her stay or going: the affair cries haste,/And speed must answer it.” (96) と答えて、デズデモウナのキプロス行きを全てオセローの一存に委ねる大公を創造する。そしてその結果としてシェイクスピアは、ヴェニスとは無関係に自らの意志と責任に於てデズデモウナ、イアーゴー、エミリアをキプロスに同行するオセローを創造し、トルコ艦隊をキプロスで迎え撃つ任務のみを彼に与える大公を創造するのである。それは一体どのような創造的意図に基づくのであろうか。嵐によるトルコ軍全滅の内容である (ii) との関連で考察しなければならないが、その一方でシェイクスピアは、イアーゴーの独白を創造し、その中で、“I hate the Moor;/And it is thought abroad, that 'twixt my sheets/He has done my office: I know not if 't be true;/But I, for mere suspicion in that kind,/Will do as if for surety.” (104) と彼に言わせて、イアーゴーがオセローを憎悪する新たな理由を明示し、更にキャシオーを免職させてその地位を奪い、オセローの耳にキャシオーとデズデモウナの親密さを捏造して注入する計画を語らせているが、チンティオでは、旗手の妻とムーア間にそのような関係はみえず、従ってシェイクスピアはイアーゴーの疑心を創造し、それを更に独白：“Now, I do love her too,……/But partly led to diet my revenge,/For that I do suspect the lusty Moor/Hath leap'd into my seat:/And nothing can or shall content my soul/Till I am even'd with his, wife for wife,/Or failing so, yet that I put the Moor/At least into a jealousy so strong/That judgement cannot cure.” (140) へと繋げ、のちにエミリアが否定することになるが、彼女とオセローの過去の関係を疑い、復讐を明言するイアーゴーを創造するのである⁽¹⁴⁾。妻の交換は不可能としても、少くともオセローを嫉妬で苦しめるためにロダリーゴーを利用し、キャシオーとデズデモウナの仲について讒言をオセローの耳に入れようと言うのである。既に述べたように、チンティオは、Emilia-Othello 関係に相当する人物関係は描いておらず、まして旗手の憎悪の対象はムーアではなくディズデモナであり、ロダリーゴーも登場しないわけであるから、シェイクスピアは Disdemona-Captain 関係を旗手が捏造することだけをチンティオと共通して残し他を全て創造することにより、ここでオセローに対して復讐心を抱くイアーゴーを創造しようとい意図していると言えよう。

(ii) 第二幕になるとモンターノが登場する。彼は大公の言う有能な仮総督であるが、チンティオの記述に登場しない人物であり、従ってシェイクスピアが創造した

人物となる。その創造的意図は何だったのだろうか。モンターノーと有力者達は嵐でトルコ艦隊が散り散りになったろうと語り合っている(105)が、彼らの関心は、事前に知らされているトルコ艦隊来襲に注がれており、彼らはオセローらの来島をまだ知らないのである⁽¹⁵⁾。それは、創造人物のモンターノーをはじめとする彼らがこの場面でオセロー一行の安否に少しの懸念もみせず、トルコ艦隊にのみ心を奪われているところから引き出されるのであるが、更にその後、キャシオー到着の報告を受けて、“How! is this true?” (107)と驚き、その知らせの後で不安に駆られオセローの無事を祈ることからも明らかであり、かつての部下であったことでオセローの人は柄は知っていても、結婚して妻がいることも知らず、イアゴーをも知らないのである。いずれにせよ、モンターノーは予めオセローがトルコ軍迎撃の任務を帯びてキプロスへ来島することを実際に上陸するまで知らずにいたわけで、これは極めて不思議なことと言わねばならない。繰り返しになるが、チンティオの原話では、駐屯軍の人事異動でムーアが指揮官として赴くわけであり、従って受け入れ側の変更であるため、ムーアの来島は事前に天下周知のことであったであろうが、どういうわけかシェイクスピアは、モンターノーがオセローらの来島を知らないように創造しているのである。暴風によるトルコ艦隊全滅を創造したこととの関連で考察してみよう。迎える側のモンターノーが承知していないということは、この件についてヴェニスからは何の連絡もないということであり、又、嵐のためにトルコ軍が全滅した結果、上陸前からオセローはヴェニスで課した任務から解放されていることになる。即ちキプロスに到着したオセローは、既に仕事を失っており、迎える側もヴェニスとは何の連絡もないわけであるから、オセローにとって、キプロスにおけるヴェニスと関連した公的な存在理由は既に到着前より消滅してしまったと言ってもよかろう。モンターノー達にとってオセローの到着は突然の前触れなしの到着であり、しかもトルコ軍はオセロー来島前に既に存在していないわけであるから、シェイクスピアは、キプロスに上陸したオセローが何らヴェニスと係りを持たなくなるよう、上陸前(トルコ艦隊全滅)から上陸後(モンターノーらが事前にオセローの来島を知らなかった)に至るまで念入りに創造していると言えよう。それはどのような意図によるものであろうか。それは、キプロス島⁽¹⁶⁾の絶対化であり、普遍化であって、そこでの事件の絶対性、普遍性をそれによって確保することにあるのではないだろうか。ヴェニスがかもともと消えている上にトルコ軍までもが存在しなくなり、その結果として舞台はキプロスであってキプロスでなくなり、そのまま一挙に普遍的空間へと変質し、そこを舞台にして悲劇が演じられることになるのだ。従ってトルコ軍来襲、嵐、そしてモンターノーの創造は、二幕

一場の時点でオセローを来島させた上で、キプロスをヴェニスとは無関係の絶対的空間とするためのものであろう。そしてオセローは、自らの責任においてデズデモウナを来島させたのであり、彼女の来島に大公の意向は入っていないわけであるから、彼女もヴェニスとは無関係の人物になり、ロダリーゴーもイアーゴーの説得を受け変装してキプロス入りを果し(136)、又エミリアもチンティオとは異りオセローの要望に従ってイアーゴーに同行した(101)わけであるから、彼らも又ヴェニスとは何の関係もなく、絶対的空間へと変質したキプロスに勢揃いすることになるのである。又、シェイクスピアが創造した二幕二場で、“トルコ艦隊全滅の確報が入ったので各人酒宴を催せ”(141)との布告が出されるが、それは、繰りかえしになるが、トルコ軍は攻撃前に自然の暴威に屈したのであり、オセローも嵐の中で同じ運命を辿ったとしても何の不思議もなかったし、偶然生き延びて上陸したオセローが緻密な意味でトルコ軍に対して勝利を収めたわけではなく、双方戦端を開く前に嵐を相手に戦い、オセローは勝利を収め、トルコ軍は敗北しただけのことであって、その意味で布告の内容はトルコ艦隊全滅という確報を喜びつつオセローの結婚を祝う酒宴へと筋書を押し進めるためのものとなるであろう⁽¹⁷⁾。即ち、戦時色が一掃されて新婚の祝宴気分にした夜警の場面へとプロットが引き継がれて行くことになるのである。このように、シェイクスピアはトルコ軍をキプロス島に押し進ませてオセローをキプロスに向わせ、守備隊には事前に通告しない上に嵐で艦隊を全滅させ、オセローが上陸したときにキプロスを一種の真空状態にしてヴェニスと切り離し、そこでオセローの責任で来島させたデズデモウナ、イアーゴー、エミリア、キャシオーや、創造人物ロダリーゴーを用いてオセローを主人公にした普遍的な悲劇を創造する意図が明らかとなるだろう。キプロスをキプロスではない普遍的な場所に変えたのも、デズデモウナのキプロス行き決定をオセローに委ねた大公を創造してこの絶対的空間にオセローとイアーゴーの意志で悲劇の主要な登場人物を集合させたのもこのような創作意図によるものと言えよう。あとは、そこで悲劇が自律的にどのように胚胎され、生育し、そして破局へと向うかを見守って行くのが我々に残された課題であろう。丁度、キプロスへ渡る直前にイアーゴーが独白する台詞“*I have't. It is engendered. Hell and night/must bring this monstrous birth to the world's light.*”(104)は、ヴェニスではなくキプロスでオセローの悲劇が生まれることを見事に暗示している台詞なのだから。

引き続き夜警の場面に入り、チンティオはキャプテンが彼を免職させたと書くが、それに相当してシェイクスピアは創造人物ロダリーゴーを道具に利用してキャシオー免職の陰謀を巡らすイアーゴーを創造するのである。即ち、この場面でイアーゴーと

モンターノとの関係を創造することにより、キャシオーの酒癖について予めイアーゴはモンターノに知識を入れた後 (158)、ロダリーゴを道具に刃傷事件を引きおこし (161)、制止に入ったモンターノをキャシオーが傷つける (171) ことからイアーゴの計画通りキャシオーの免職へと事件が発展して行くようにシェイクスピアはチンティオを変えていると言えるだろう。キャプテンに打たれる衛兵は、シェイクスピアではモンターノになり替っているとも言えようが、その事件にチンティオの旗手は無関係なのであるからその改変の意図を探求しなければならない。キャシオーの酒癖の悪さ→キャシオーに対するロダリーゴの侮辱→ロダリーゴとキャシオーの争い→モンターノ仲裁→キャシオー、モンターノを傷つける→島全体の大騒動→キャシオー免職→キャシオー復職をデズデモウナに依頼→デズデモウナ、オセローに依頼→イアーゴ、オセローに讒言というイアーゴの陰謀の筋書が読めてくるのではなかろうか。そしてそれは、チンティオから逸脱してモンターノを創造することにより、キャシオー免職へ主導的役割を果すイアーゴを作者が創造した結果なのである。結局、モンターノもキャシオーもロダリーゴも、オセローを陥れることを目的とするイアーゴの陰謀に利用される人物としてシェイクスピアが創造していると言えるだろう。

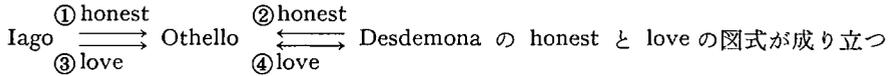
(iii) チンティオでは、キャプテンはその後ムーアに追放され、ヴェニスに戻った旗手に唆かされてムーアを告発するが、ディスデモナの死までは旗手と何の関係もないのでイアーゴとキャシオーとの関係はシェイクスピアの創造した対話関係となり、更に、イアーゴがキャシオーに対し、復職をデズデモウナを通してオセローに頼むよう提案する (187) のも原話にないシェイクスピアの創造した内容となるが、シェイクスピアは、独白中にみえるイアーゴのキャシオーに対する計略を創造し、キャシオーとデズデモウナの関係をオセローが疑うようにしむける陰謀がイアーゴの主導によってであることを創造している。チンティオにこれに相当する記述は見当らず、ディスデモナが、免職されたキャプテンに同情して夫とキャプテンの和解を計ろうと努力する記述だけであり、旗手は、既に述べた通り、キャプテンと係りを持たないのである。従って、Cas.-Iago 関係を創造したシェイクスピアの意図は、キャシオー免職同様、復職にもイアーゴが計画通り主導的役割を果しつつ、チンティオのディスデモナではないオセローへの復讐を進めている彼の姿を創造することであろう。又、チンティオにおける旗手の妻は、真相の全容を知る人物となっているが、キャプテンとは何の関係も持たない。シェイクスピアでは、キャシオーがデズデモウナへの仲介をエミリアに依頼するよう創造した結果 (196)、Des.-Cas. の対話関係はエミリアに

よって実現し、そしてそのエミリアに仲介を命じたのは夫イアーゴで (190) あった。チンティオでのこの関係は、ディスデモナがキャプテン復職をムーアに自発的に依頼するのみで、キャプテンがそのためにディスデモナと接触することはない。シェイクスピアは、チンティオにはないこの関係を、Cas.-Des. 関係で描き、その依頼の場面（それもイアーゴの指示に従ったまでだが）をオセローが目撃し、キャシオーがデズデモウナの許を逃げるように離れて行く姿を見る (205) ように創造しているのである。従ってデズデモウナに復職を依頼するキャシオーはシェイクスピアの創造となり、エミリアを介して行うのもチンティオには見られないシェイクスピアの創造となる。チンティオでは、免職を悲しく受けとめたディスデモナが夫のムーアと親友のキャプテンの仲を修復しようと動くわけであり、それはキャプテンに頼まれたのでもなく、まして旗手の妻がディスデモナへの仲介役を引き受けたのでもない。ディスデモナの同情と悲しみがそうさせたのである。従ってシェイクスピアはチンティオに見られない Iago-Cas., Cas.-Emil., Des.-Cas. 関係を創造し、イアーゴの悪計がオセローの身に直接迫るように描いているのである。

(iv) シェイクスピアは、二幕三場でイアーゴの独白を創造し (190)、二つのことを実行しようとするイアーゴを創造する。即ちそれは、エミリアに命じてキャシオーをデズデモウナに引き合わせることに、キャシオーがデズデモウナに頼んでいるその場面をオセローに目撃させることの二つで、三幕で早速それを実行に移すのである。まず、Cas.-Iago 関係を創造することによりキャシオーとデズデモウナを会わせてそれをオセローに目撃させ、Emil.-Cas. 関係を創造して、デズデモウナの願いを聞いたオセローが怪我をしたモンターノの手前キャシオーを免職させたわけで、いずれ折をみて復職させると言ったことをエミリアをしてキャシオーに伝えさせて (196)、キャシオー復職に人の頼みは必要なく、あとは時機のみであることを明示し、免職後の Cas.-Des. 関係を創造して、デズデモウナが積極的にキャシオー復職に努力する姿を創造し (206)、Oth.-Des. 関係の内容として、二人の結婚の際、キャシオーがオセローのために役立った事実を創造し、Oth.-Iago 関係の内容として、二人の結婚の成行にキャシオーが全面的に参加していたことを早速利用するイアーゴを創造し (209)、その結果生まれるオセローの疑心をチンティオのそれより強め、ブラバンシヨの警告を想起して父親には秘密に結婚できたデズデモウナは、オセローを欺かないとも限らないと言外に匂わせて、キャシオーと一緒にデズデモウナに注意するように説くイアーゴを創造し (209)、Des.-Oth. 関係の内容として、痛む額の手当をしようとデズデモウナが縛ろうとしたハンカチをオセローが小さすぎるとしてはずして落

し、恐らく拾おうとしたデズデモウナを“Let it alone.”と言って制止し、ハンカチをそのままにして退場するオセローを創造して(213)、ハンカチ紛失にデズデモウナは責任がなく、オセローに責任があるように描き⁽¹⁸⁾、更に、そのハンカチは夫が欲しがり盗んでくるように願っていた結婚記念のハンカチだと知って拾い上げ、現物ではなく刺繍の模様を写しとって夫の機嫌をとり結ぼうと考え独白するエミリアを創造する(214)のである。少し詳細に読んでみると⁽¹⁹⁾、彼女は、たまたま側を通ったイアゴーに不安を覚えてそのハンカチの使用目的を尋ねるが何も聞き出せないまま奪われてしまうのである(215)。即ちエミリアは、そのハンカチをデズデモウナが失くすことの重大性に気付いて夫に抵抗するが、それも空しく奪われ、取り戻そうと努力したが結局ハンカチはイアゴーの手中に入り、イアゴーの言うデズデモウナとキャシオーの「不義な関係」をオセローが信ずる“目に見える証拠”として悪用されて行くことになる。従って、このハンカチ紛失事件でエミリアは、女主人のデズデモウナではなくオセローが自ら落したそれを偶然拾っただけで夫の指示通りに盗んだわけではなく、それを夫に強引に奪われてしまうということで、そのハンカチが惹起する悲劇的結末にエミリアは責任を負ってはいないことは明らかであろう。だが、最後に事の真相を全面的に知っているチンティオの旗手の妻と同様に、イアゴーの陰謀を暴露し、全てをオセローに伝えながらデズデモウナ絞殺を非難する人物は、他ならぬこのエミリアなのである。夫に協力してハンカチを盗み出すエミリアであるならば、結末で真相を明らかにして夫を不利な立場に陥れるエミリアは考えにくいのだが、ハンカチがイアゴーの手に渡る事実経過に彼女はデズデモウナとともに責任はなく潔白だからこそ、オセローに真実を伝える彼女の資格が保証され、そこからハンカチ紛失に責任のある主人公自身の悲劇が生まれてくるのである。このように、ハンカチ紛失事件に関する Iago-Emil. 関係を創造することにより、エミリアの潔白を創造したシェイクスピアは、引き続き Oth.-Iago 関係の内容として“ocular proof”を求めつつチンティオのムーアより更に激しくイアゴーを非難するオセローに変更し(218)、その中で、“By my world, I think my wife be honest and think she is not;/I think that thou art just and think thou art not./I'll have some proof.”というオセローが、イアゴーとデズデモウナのどちらを選択すべきか二者択一を迫られている姿を描いている。チンティオのムーアは、旗手の言葉を真実と信じつつ、より多くの情報や判断を旗手から引き出そうと脅したりして迫るが、又、デズデモウナにキャプテンの復職を迫る理由を尋ねたりするが、やはり旗手を相談相手として妻との間に距離を置き、シェイクスピアのような厳しい二者択一関係に立ってはいないと言え

よう。しかも、この変更された二者択一関係を全篇に亘って精細に吟味してみると、その内容は、イアゴー及びデズデモウナのオセローに対する誠実、正直、貞潔(=“honest”)⁽²⁰⁾と、同じくイアゴー、デズデモウナの彼に対する一方通行的及び相互的愛情(=“love”)⁽²¹⁾であることが判明するのである。即ち、オセローを中にはさむ三者の関係について、



と言えよう。そこで ①～④ を網羅的に調査すれば次のようになる：(イタリクス筆者)

① honest:

- Oth. A man he (Iago) is of *honesty* and trust……. (1. 3. 281)
- Oth. *Honest* Iago,……. (1. 3. 291) (2. 3. 171) (5. 2. 73)
- Iago. The Moor is of a free and open nature,/That thinks men *honest* that but seem to be so,……. (1. 3. 403-4)
- Oth. Iago is most *honest*. (2. 3. 6)
- Oth. I know,Iago,/Thy *honesty* and *love* doth mince this matter,/Making it light to Cassio,……. (2. 3. 240-2)
- Oth. Why did I marry? This *honest* creature doubtless/Sees and knows more, much more, than he unfolds. (3. 3. 240-1)
- Oth. This fellow's of exceeding *honesty*,/And knows all qualities, with a learned spirit,/Of human dealings. (3. 3. 255-7)
- Iago. O wretched fool,/That livest to make thine *honesty* a vice!……/To be direct and *honest* is not safe.……and from hence/I'll *love* no friend, sith *love* breeds such offence.
- Oth. Nay, stay: thou shouldst be honest.
- Iago. I should be wise; for *honesty's* a fool/and loses that it works for. (3. 3. 375-80)
- Iago. I do not like the office:/But, sith I am enter'd in this cause so far,/Prick'd to't by foolish *honesty* and *love*,/I'll go on. (3. 3. 407-10)
- Oth. 'Tis he:……O brave Iago, *honest* and just,……. (5. 1. 31)
- Oth. Ay, 'twas he that told me first?/An *honest* man he is, and hates the slime/That sticks on filthy deeds. (5. 2. 146-8)
- Oth. My friend, thy husband, *honest*, *honest* Iago. (5. 2. 153)

② honest:

- Oth. I do not think but Desdemona's *honest*. (3. 3. 223)
- Oth. I'll tear her all to pieces!
- Iago. Nay, but be wise: yet we see nothing done;/She may be *honest* yet.

- (3. 3. 428-30)
- Oth. Why, what art thou?
Des. Your wife, my lord: your true/And loyal wife. (4. 2. 32-3)
- Oth. Swear thou art *honest*. (4. 2. 37)
Des. I hope my noble lord esteems me *honest*. (4. 2. 64)
Emil. Moor, she was chaste; she *loved* thee, cruel Moor; (5. 2. 247)
Oth. Cold, cold, my girl,/Even like thy chastity. (5. 2. 273-4)
- ③ love:
- Iago. I must show out a flag and sign of *love*.……. (1. 1. 157)
Iago. I'll……./Make the Moor thank me, *love* me and reward me,……. (2. 1. 299)
- Oth. If thou dost *love* me,/Show me thy thought.
Iago. My lord, you know I *love* you.
Oth. I think thou dost;/And for I know thou'rt full of *love* and *honesty*,……. (3. 3. 114-7)
Iago. I am glad of it; for now I shall have reason/To show the *love* and duty that I bear you/With franker spirit……. (3. 3. 191-3)
Iago. I humbly de beseech you of your pardon/For too much *loving* you. (3. 3. 210-1)
Iago. I hope you will consider what is spoke/Comes from my *love*. (3. 3. 214-5)
Oth. I greet thy *love*,……. (3. 3. 466)
- ④ love:
- Oth. How I did thrive in this fair lady's *love*,/And she in mine. (1. 3. 125-6)
Oth. Upon this hint I spake:/She *loved* me for the dangers I had passed,/And I *loved* her that she did pity them. (1. 3. 165-7)
Des. That I did *love* the Moor to live with him,……. (1. 3. 245)
Des. But that our *loves* and comforts should increase……. (2. 1. 188)
Oth. Look here, Iago;/All my fond *love* thus do I blow to heaven./'Tis gone. (3. 3. 442-3)
Oth. Think on thy sins.
Des. They are *loves* I bear to you.
Oth. Ay, and for that thou diest. (5. 2. 40-1)
Oth. Then must you speak/Of one that *loved* not wisely, but too well; (5. 2. 339-40)

このように, “honest”, “love” という同一語でオセローとイアゴー, オセロー

とデズデモウナの三者の関係が、オセローを中にはさむ形で同時に規定されているのであって、両者の間に立つ主人公は、既に述べたように両者のどちらの“honest”を、どちらの“love”を真実のものとして選択したらよいかの状況に置かれていると言えよう。イアーゴの悪計の対象をチンティオのディスデモナからオセローに変更したシェイクスピアは、一方の“honest”を信じれば他方の“honest”が否定され、一方の“love”を信じれば他方の“love”が否定されるという二者択一を迫られる位置に主人公を立たせ、イアーゴをその意味でデズデモウナと同等の重い立場に置いていると思われるのである。従って、二つの関係が同時に存立し得ない二者択一状態に早くから入り、そこから脱出できない主人公を作者は創造し、最終的に、イアーゴが自分を憎悪する人物であると見抜けずに誤って彼との関係を選んだためにデズデモウナとの関係を棄てざるを得ないという選択を行った必然の結果としての悲劇を作者は描いているのではないだろうか。更にシェイクスピアは Cas.-Bian. 関係を創造し (231), チンティオのキャプテンと異り、そのハンカチが誰のものかわからずに、模様を写すようキャプテンの妻ではなくビアンカに依頼するキャシオーを創造し、その上、チンティオでは、キャプテンの妻がその仕事を行うのに反し、それを拒否するビアンカを創造し (257), キャシオーが実際にハンカチを持っていることをオセローに目撃させて確信させ、不義の寝床でデズデモウナを絞殺するという、チンティオとは異なる殺害方法を教えるイアーゴを創造しているのである (259)。従って、シェイクスピアは、それぞれの対話関係の創造を通じて Iago-Oth.-Des. の二者択一関係を創造し、チンティオのムーアがオセローと異なり旗手の言葉を疑わず証拠を求めるだけであるのに対し、シェイクスピアでは、イアーゴの言葉が真実であることを証明する“ocular proof” (勿論イアーゴの計略によるハンカチであるが) を提示されたオセローが、イアーゴの言葉を信じてイアーゴとの関係を選択するよう創造されているのである。その意図は果して何であろうか。シェイクスピアはこれまで、イアーゴのオセローに対する悪計の誕生及び進展を創造しながら、その過程で自らの“honest”, “love”を信じ込ませるイアーゴを創造して二者択一関係が成立するよう描き、それがハンカチによってイアーゴを選択するというオセローの愚かさで、Oth.-Des. 関係が破壊される悲劇を描いているのではなからうか。一方の選択がそのまま他方の破壊となる関係が創り出され、イアーゴの陰謀が関係の両立を許さず選択を迫るように創造されているのである。

(v) チンティオにおけると同様、キャシオー暗殺をオセローに頼まれたイアーゴは、ロダリーゴを唆すが、キャシオーをオセローの後任にするシェイクスピアの

創意から、モーリタニアへ赴くオセロー夫妻を身近に引き止めるために、栄転するキャシオーを殺せばデズデモウナに接していただけるというロダリーゴーに対するイアーゴーの説明(306)も創造となるのであり、チンティオのように、旗手が直接キャプテンを襲うのとは異り、シェイクスピアはこのように理由を考案してロダリーゴーに襲わせ、返り討ちに会わせ、更にイアーゴーに刺させるのだが、イアーゴーの過去の悪事をしたためのロダリーゴーの手紙が創造人物ロドヴィーコーの手に入り、彼の口を通して(441)イアーゴーの陰謀が暴露されるというチンティオにない工夫へと繋げてゆくのである。

(vi) シェイクスピアは、キャシオーとデズデモウナの仲をオセローに尋ねられたとき、デズデモウナの潔白を強く主張するエミリアを創造し(390)、又、Des.-Emil. 関係の案出された内容として、オセローの不興は嫉妬⁽²²⁾が原因だと考えているエミリアを創造し、デズデモウナを娼婦呼ばわりするオセローは誰か悪党に騙されていると真実を言い(302)イアーゴーを慌てさせ、デズデモウナを殺した理由は、彼女のキャシオーに対する姦通であり、又その偽りの不義をオセローに知らせたのは夫イアーゴーであるとオセローから聞かされて信じられないことだと驚きつつ、逆にデズデモウナの死がイアーゴーの讒言によることをオセローに知らせるエミリアを創造し(412)、ハンカチ紛失事件を思い巡らし、実行された夫イアーゴーの陰謀を暴露してオセローに誤りを悟らせ、デズデモウナは、“Moor, she was *chaste*; she *loved* thee, cruel Moor;” (イタリックス筆者)であったと彼女の貞潔と愛情を証言して死んでゆくエミリアを創造するのであり、これは二者択一関係のうち一方のOth.-Des. 関係の“*honest*”, “*love*”を真実のものであったと証言したことになるのである。既に述べたように、エミリアはハンカチ紛失自体には何の責任も負わないため、最後に真相を伝える人物としての立場を確立していたわけであり、チンティオとの相違点も正にその点にあるのであるが、作者によって入念に描き込まれた人物であることは明らかであろう。同様にロドヴィーコー、グレイシャーノーを創造したシェイクスピアは、キャシオーの暗殺(未遂)がイアーゴーによることをロダリーゴーの手紙の創造によって伝え、キャシオー免職とロダリーゴー暗殺もイアーゴーの陰謀であることをチンティオのヴェニスにいるキャプテンとは異りまだキプロスに滞在中のキャシオーとロダリーゴーの口を通して伝えるのである。従って、劇の最終場面でシェイクスピアは、チンティオと異りエミリア、ロダリーゴー、ロドヴィーコー、グラシャーノー、キャシオー、モンターノーを登場させ、イアーゴーの陰謀を彼らによって暴露し、オセローが騙されて潔白なデズデモウナを殺害したことを指摘してその愚を悟った主人公を

死に至らしめる悲劇を創造していると言えよう。

3

このように、シェイクスピアとチンティオの乖離を (i)~(vi) で詳しく考察してきたが、ここで全体的に俯瞰すると、チンティオから離れて、トルコ軍キプロス来襲と嵐による艦隊全滅、その直後のオセロー一行のキプロス到着、モンターノー達がオセローらの来島予定を知らなかったことを考え出すことにより、シェイクスピアはキプロスのヴェニスに関連における意味を捨象して絶対的空間をそこに設定し、ヴェニスとはこれ又無関係に、オセロー、イアーゴの責任において同行した人物群を創造したり変更を加えたりしながらその絶対的空間に化したキプロスに集合させ、イアーゴの悪計の誕生と生長の跡を、イアーゴのオセローに対する悪の動機からキャッシュー免職、そして復職運動、イアーゴとデズデモウナのどちらの“honest”, “love”を信ずべきか悩みながら両者との緊張関係に立つオセロー、ハンカチ紛失事件及びその紛失に責任のあるオセローの誤った選択、張り詰めた二者択一関係の崩壊、ハンカチ紛失に責任のないデズデモウナの死、及びイアーゴの陰謀発覚と、その結果としてオセローの死という順序で創造しつつ作者は辿るのだが、その際に人物や人間関係をチンティオから逸脱して創造、変更するポイントを、まず、イアーゴとデズデモウナの間におセローをはさむ“honest”, “love”の二者択一関係を、オセローの目に映るイアーゴの“honest”, “love”がゆるぎのないその通りのものに見えるようにする(=“men should be what they seem.”) ことによって、文字通りの二者択一関係となるように創造すること、次にオセローを欺き Oth.-Des. の“honest”, “love”関係を破壊すること、そして最後に、自らデズデモウナとの関係を破壊したオセローに、それは騙された結果であると知らせ、自らの愚かさの犠牲がデズデモウナの死であったと悟る主人公を死に追いやる点におくことによって、“one that loved not wisely, but too well.”であるオセロー自身の普遍的な悲劇を完成しているのである。

Othello

Shakespeare					Cinthio
幕	場	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
I	i	1- 78	Rod. ↔ Iago.	1	
		79	Rod. → Bra.	2	
		80- 82	Iago. → Bra.	3	
		83- 84	Bra. → (Iago., Rod.)	4	
		85	Rod. → Bra.	5	
		86	Iago. → Bra.	6	
		86	Bra. → (Iago., Rod.)	7	
		87- 93	Iago. → Bra.	8	
		93	Bra. → (Iago.)	9	
		94-108	Rod. ↔ Bra.	10	
		109-114	Iago. → Bra.	11	
		115	Bra. → Rod.	12	
		116-118	Iago. → Bra.	13	
		119	Bra. → Rod.	14	
		119	Iago. → Bra.	15	
		120-145	Bra. ↔ Rod.	16	
		145-160	Iago. → Rod.	17	
		161-163	Bra.	18	
		163-164	Bra. → Rod.	19	
		164	Bra.	20	
		165	Bra. → Rod.	21	
		165	Bra.	22	
		166	Bra. → Rod.	23	
		166-167	Bra.	24	
		167	Bra. → Rod.	25	
		167-168	Bra. → Servants.	26	
		168-175	Bra. ↔ Rod.	27	
		176	Bra. → Servants.	28	
		176	Bra. → Rod.	29	
		177	Bra. → Servants.	30	
		177-182	Bra. → Rod.	31	
		182-183	Bra. → Servants.	32	

幕	場	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
		184	Bra.→Rod.	33	
	ii	1- 33	Iago.←→Oth.	34	……although the parents of the lady strove all they could do to induce her to take another husband, she consented to marry the Moor;…… (Parents-Disdemona) (Disdemona-Moor)
		34- 48	Oth.←→Cas., Servants.	35	
		49- 53	Cas.←→Iago.	36	
		53	Iago.←→Oth.	37	
		54	Cas.→Oth.	38	
		55- 56	Iago.→Oth.	39	
		56	Oth.→Bra.	40	
		57	Rod.→Bra.	41	
		57	Bra.→Servants.	42	
		58	Iago.→Rod.	43	
		59	Oth.→all.	44	
		60- 79	Oth.→Bra.	45	
		80- 81	Bra.→Servants.	46	
		81- 84	Oth.→all.	47	
		84- 91	Oth.→Bra.	48	
		91- 99	Off.→Bra.	49	
	iii	1- 4	Duke.←→1st Sen.	50	……The Signoria of Venice made a change in the troops whom they used to maintain in Cyprus, and they appointed the Moor commander of the soldiers……(Signoria-Moor)
		4- 12	2nd Sen.←→Duke.	51	
		12	Sailor.→all.	52	
		13	1st Off.→all.	53	
		13- 16	Duke.←→Sailor.	54	
		17- 31	Duke.←→1st Sen.	55	
		32	1st Off.→all.	56	
		33- 35	Mess.→all.	57	
		36- 39	1st Sen.←→Mess.	58	
		39- 43	Mess.←→Duke.	59	
		44- 47	Duke.←→1st Sen.	60	
		48- 49	Duke.→Oth.	61	
		50- 59	Duke.←→Bra.	62	
		59	Duke. Sen.→Bra.	63	
		59- 73	Bra.←→Duke.	64	
		73	all.→Bra.	65	
		74	Duke.→Oth.	66	
		75	Bra.→Duke.	67	
		76- 94	Oth.→all.	68	

幕	場	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
		94-106	Bra.→all.	69	
		106-109	Duke.→Bra.	70	
		110-114	1st Sen.→Oth.	71	
		114-120	Oth.→Duke.	72	
		120	Duke.→Servants.	73	
		121	Oth.→Iago.	74	
		122-126	Oth.→all.	75	
		126	Duke.→Oth.	76	
		127-169	Oth.→all.	77	
		170	Duke.	78	
		171-176	Duke.→Bra.	79	
		176-187	Bra.→Des.	80	
		188	Bra.→Duke.	81	
		189	Bra.	82	
		190-196	Bra.→Oth.	83	
		196-218	Bra.↔Duke.	84	
		219-220	Duke.→all.	85	
		220-226	Duke.→Oth.	86	
		227-232	Oth.→Sen.	87	
		233-238	Oth.↔Duke.	88	
		238	Bra.→Duke.	89	
		239	Oth.→Duke.	90	
		239-256	Des.↔Duke.	91	
		257-274	Oth.↔Duke.	92	
		275	Des.↔Duke.	93	
		275	Oth.→Duke.	94	
		276	Duke.→all.	95	
		277-284	Duke.↔Oth.	96	
		285	Duke.→all.	97	
		285-287	Duke.→Bra.	98	
		288	1st Sen.→Oth.	99	
		289-290	Bra.↔Oth.	100	
		291-294	Oth.→Iago.	101	
		295-297	Oth.→Des.	102	
		298-376	Rod.↔Iago.	103	
		377-398	Iago.	104	

幕	場	行	対話関係	対話関係 番号	人物関係
II	i	1- 19	Mon. ←→ 1st gent. 2nd gent.	105	……they pursued their voyage, and
		20- 24	3rd gent. → Mon., gent.	106	with a perfectly tranquil sea arrived
		25- 42	Mon. ↔ 3rd gent.	107	safely at Cyprus. (Moor-Disdemona)
		43- 51	Cas. ↔ Mon.	108	Now amongst the soldiery there was
		52- 59	Cas. ↔ 4th gent. 2nd gent.	109	an Ensign, man of handsome figure,
		60- 65	Mon. ↔ Cas.	110	but of the most depraved nature in
		65- 73	Cas. ↔ 2nd gent.	111	the world. This man was in great
		73- 77	Mon. ↔ Cas.	112	favour with the Moor, who had not
		77- 82	Cas.	113	the slightest idea of his wickedness;
		82- 84	Cas. → men.	114	……(Ensign-Moor)
		85- 93	Cas. ↔ Des.	115	This man had likewise taken with
		94- 95	gent. ↔ Cas.	116	him his wife to Cyprus… she was
		96	Cas. → Iago., Emil.	117	much loved by Disdemona…(Ensign-
		97-102	Cas. → Iago.	118	wife)(wife-Disdemona)
		103-107	Des. ↔ Iago.	119	……there was a certain Captain of a
		107-111	Emil. ↔ Iago.	120	troop, to whom the Moor was much
		112-113	Des. ↔ Iago.	121	affectioned. (Captain-Moor)
		114-115	Iago. ↔ Emil.	122	Disdemona… showed him proofs of
		116-133	Des. ↔ Iago.	123	the greatest kindness, (Disdemona-
		133-135	Emil. ↔ Iago.	124	Captain)
		136-158	Des. ↔ Iago.	125	Now the wicked Ensign……fell pas-
		159	Des. → Emil.	126	sionately in love with Disdemona,
		160-163	Des. ↔ Cas.	127	……(Ensign-Disdemona)
		164-173	Iago.	128	……he at length resolved to accuse
		174	Iago. → all.	129	her of unfaithfulness to her husband,
		174-175	Cas. ↔ Des.	130	and to represent the Captain as her
		176-193	Oth. ↔ Des.	131	paramour. (Ensign-Moor) (Ensign-
		193-195	Iago.	132	Captain)
		195	Oth. → Des.	133	
		196-197	Oth. → friends.	134	
		198-201	Oth. → Des.	135	
		201-205	Oth. → Iago.	136	
		205-206	Oth. → Des.	137	
		207-208	Iago. → Sold.	138	
		208-276	Iago. ↔ Rod.	139	
		277-303	Iago.	140	

幕	揚	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
	ii	1- 11	her. → people.	141	
	iii	1- 8	Oth. ↔ Cas.	142	……the Captain, having drawn his sword upon a soldier of the guard, and struck him, the Moor deprived him of his rank;……(Captain-soldier) (Captain-Moor)
		8- 10	Oth. → Des.	143	
		11	Oth. → Cas.	144	
		12- 43	Cas. ↔ Iago.	145	
		44- 59	Iago.	146	
		60- 62	Cas. ↔ Mon.	147	
		63	Iago. → Ser.	148	
		64- 68	Iago.	149	
		69	Iago. → boys.	150	
		70- 80	Cas. ↔ Iago.	151	
		81- 82	Mon. → Cas.	152	
		83- 91	Iago.	153	
		92	Iago. → Ser.	154	
		93-105	Cas. ↔ Iago.	155	
		105-113	Cas. ↔ Gent.	156	
		114-115	Mon. → masters.	157	
		116-130	Iago. ↔ Mon.	158	
		131-132	Iago. → Rod.	159	
		133-139	Mon. ↔ Iago.	160	
		140	Cas. → Rod.	161	
		141-143	Mon. ↔ Cas.	162	
		144-145	Rod. ↔ Cas.	163	
		146-150	Mon. ↔ Cas.	164	
		151	Iago. → Rod.	165	
		152-153	Iago. → Cas., Mon.	166	
		154	Iago. → masters.	167	
		155-156	Iago.	168	
		156-157	Iago. → Cas.	169	
	158	Oth. → all.	170		
	158-159	Mon.	171		
	159	Oth. → Mon., Cas.	172		
	160-162	Iago. → Cas.	173		
	163-170	Oth. ↔ Mon., Cas.	174		
	171-181	Oth. ↔ Iago.	175		
	182-183	Oth. → Cas.	176		

幕	場	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
		184-198	Oth. → Mon.	177	
		198-211	Oth. → all.	178	
		211	Oth. → Iago.	179	
		212-218	Mon. ↔ Iago.	180	
		218-242	Iago. ↔ Oth.	181	
		242-245	Oth. → Cas.	182	
		245-246	Des. ↔ Oth.	183	
		247	Oth. → Mon.	184	
		248-249	Oth. → Iago.	185	
		250-251	Oth. → Des.	186	
		252-325	Iago. ↔ Cas.	187	
		326-352	Iago.	188	
		352-371	Iago. ↔ Rod.	189	
		371-377	Iago.	190	
III	i	1- 2	Cas. → musicians.	191	
		3- 20	Clo. ↔ 1st mus.	192	
		21- 29	Cas. ↔ Clo.	193	
		30- 38	Iago. ↔ Cas.	194	
		39	Cas.	195	
		40- 54	Emil. ↔ Cas.	196	
	ii	1- 4	Oth. ↔ Iago.	197	
		5- 6	Oth. ↔ gent.	198	
	iii	1- 2	Des. → Cas.	199	Disdemona……endeavored again and again to reconcile her husband to the man. (Disdemona-Moor) (Disdemona-Captain)
		3- 5	Emil. ↔ Des.	200	
		5- 28	Des. ↔ Cas.	201	
		29	Emil. → Des.	202	This the Moor told to the wicked Ensign,…… (Moor-Ensign)
		30- 34	Cas. ↔ Des.	203	
		35	Iago.	204	……this traitor……drew the kerchief from her sash…… (Ensign-Disdemona)
35- 40		Oth. ↔ Iago.	205		
41- 87		Des. ↔ Oth.	206		
88		Des. → Emil.	207	……the wicked Ensign……left the handkerchief at the head of his bed	
88- 92		Des. ↔ Oth.	208	…… (Ensign-Captain)	
92-239		Iago. ↔ Oth.	209		
240-241		Oth.	210		
242-254	Iago. ↔ Oth.	211			
255-276	Oth.	212			

幕	場	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
		276-286	Des. ↔ Oth.	213	
		287-296	Emil.	214	
		297-317	Iago. ↔ Emil.	215	
		318-330	Iago.	216	
		330	Oth.	217	
		331-476	Iago. ↔ Oth.	218	
	iv	1- 22	Des. ↔ Clo.	219	……he asked her for the kerchief.
		23- 33	Des. ↔ Emil.	220	……‘I know not how it is—I cannot find it; …… (Moor-Disdemona)
		33- 34	Des. ↔ Oth.	221	
		34	Oth.	222	The Ensign’s wife, who knew the whole truth……could never consent to such a project, ……all she said was, ……replied Disdemona, …… (wife-Disdemona)
		35- 95	Oth. ↔ Des.	223	
		96-102	Emil. ↔ Des.	224	
		103-104	Iago. → Cas.	225	
		105-127	Des. → Cas.	226	
		128-135	Iago. ↔ Emil.	227	
		136	Des. → Iago.	228	
		136-160	Des. ↔ Emil.	229	
		161-164	Des. ↔ Cas.	230	
		165-197	Bian. ↔ Cas.	231	
IV	i	1- 48	Iago. ↔ Oth.	232	……he prayed the Ensign to contrive that he might see the handkerchief in the possession of the Captain. (Moor-Ensign)
		48- 58	Cas. ↔ Iago.	233	
		59- 92	Iago. ↔ Oth.	234	
		93-103	Iago.	235	he pointed her out to the Moor,
		103-108	Iago. ↔ Cas.	236	…… (Ensign-Captain’s wife) (Moor-Captain’s wife)
		109	Oth.	237	
		110-111	Iago. ↔ Cas.	238	Then he arranged with the Ensign to slay Disdemona and the Captain
		112	Oth.	239	…… (Moor-Ensign)
		113	Iago. → Cas.	240	
		114-115	Oth.	241	They consulted of……poison and daggers……to kill poor Disdemona,
		116-118	Iago. ↔ Cas.	242	…… (Moor-Ensign)
		119	Oth.	243	
		120-122	Cas.	244	
		123	Oth.	245	
		124-126	Iago. ↔ Cas.	246	
		127	Oth.	247	
		128-130	Cas. → Iago.	248	

幕	場	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
		131-132	Oth.	249	
		133-136	Cas. → Iago.	250	
		137-138	Oth.	251	
		139-140	Cas. → Iago.	252	
		141-143	Oth.	253	
		144-146	Cas. ↔ Iago.	254	
		147-156	Cas. ↔ Bian.	255	
		157-158	Oth.	256	
		159-160	Bian. → Cas.	257	
		161-168	Iago. ↔ Cas.	258	
		169-214	Oth. ↔ Iago.	259	
		215-217	Lod. ↔ Oth.	260	
		218	Des. → Lod.	261	
		219-222	Iago. → Lod.	262	
		223-224	Des. → Lod.	263	
		225-226	Oth. → Des.	264	
		227	Oth.	265	
		228-231	Lod. ↔ Des.	266	
		232-234	Oth. ↔ Des.	267	
		235-238	Des. ↔ Lod.	268	
		238-241	Oth. ↔ Des.	269	
		242-244	Lod. → Oth.	270	
		244-247	Oth. ↔ Des.	271	
		248-249	Lod. → Oth.	272	
		250-251	Oth. ↔ Des.	273	
		252-258	Oth. ↔ Lod.	274	
		258	Oth. → Des.	275	
		259	Oth. → Lod.	276	
		259	Oth. → Des.	277	
		260	Oth. → Lod.	278	
		260-261	Oth. → Des.	279	
		261-262	Oth. → Lod.	280	
		262	Oth. → Des.	281	
		263-265	Oth. → Lod.	282	
		265	Oth.	283	
		266-284	Lod. ↔ Iago.	284	
ii		1-18	Oth. ↔ Emil.	285	

幕	場	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
		19- 22	Oth.	286	
		23- 25	Des. ←→ Oth.	287	
		26- 29	Oth. → Emil.	288	
		30- 89	Des. ←→ Oth.	289	
		89- 93	Oth. → Emil.	290	
		94-105	Emil. → Des.	291	
		106-108	Des.	292	
		109	Iago. → Des.	293	
		110-113	Des.	294	
		113	Iago. → Des.	295	
		114-116	Emil. → Iago.	296	
		117-118	Des. ←→ Iago.	297	
		119-121	Emil. ←→ Iago.	298	
		122-123	Des. → Iago.	299	
		124-127	Emil. ←→ Des.	300	
		127-128	Iago. ←→ Des.	301	
		129-133	Emil. ←→ Iago.	302	
		134-143	Des. ←→ Emil.	303	
		143-147	Iago. ←→ Emil.	304	
		147-170	Des. ←→ Iago.	305	
		171-243	Iago. ←→ Rod.	306	
	iii	1- 2	Lod. ←→ Oth.	307	
		3- 4	Lod. → Des.	308	
		4	Oth. → Lod.	309	
		5- 9	Oth. ←→ Des.	310	
		10-103	Emil. ←→ Des.	311	
		103-104	Des.	312	
V	i	1- 7	Iago. ←→ Rod.	313	……the Ensign……sword in hand, met the Captain……and struck him a blow on his right thigh, …… (Ensign-Captain)
		8- 10	Rod.	314	
		11- 22	Iago.	315	
		23	Rod.	316	
		23- 26	Rod. ←→ Cas.	317	
		27	Cas.	318	
		28	Oth.	319	
		29	Rod.	320	
		29	Oth.	321	

幕	場	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
		30	Cas.	322	
		31- 36	Oth.	323	
		37	Cas.	324	
		38	Gra.	325	
		39	Cas.	326	
		40	Lod.	327	
		41	Rod.	328	
		42- 44	Lod.→Gra.	329	
		45	Rod.	330	
		46	Lod.	331	
		47	Gra.	332	
		48- 49	Iago.↔Lod.	333	
		50	Cas.↔Iago.	334	
		51- 52	Gra.↔Lod.	335	
		53- 58	Iago.↔Cas.	336	
		59	Iago.→Lod., Gra.	337	
		60	Rod.	338	
		61	Cas.	339	
		61- 63	Iago.↔Rod.	340	
		64	Iago.	341	
		65- 69	Iago.↔Lod.	342	
		70	Gra.→Iago.	343	
		71- 72	Iago.→Cas.	344	
		73	Iago.→Gent.	345	
		74	Bian.→all.	346	
		75	Iago.→Bian.	347	
		76- 77	Bian.→Cas.	348	
		78	Iago.→Bian.	349	
		78- 80	Iago.→Cas.	350	
		81	Gra.→Cas.	351	
		82- 83	Iago.→all.	352	
		83- 84	Bian.→Cas.	353	
		85- 86	Iago.→all.	354	
		87	Iago.→Cas.	355	
		87- 90	Iago.→all.	356	
		91- 95	Gra.↔Iago.	357	
		96	Iago.→Cas.	358	

幕	場	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
		96	Iago. → all.	359	
		97- 98	Gra. ↔ Iago.	360	
		98-100	Iago. → all.	361	
		100-101	Iago. → Bian.	362	
		101-103	Iago. ↔ Cas.	363	
		104	Iago. → Bian.	364	
		104	Iago. → Ser.	365	
		105	Iago. → Gent.	366	
		105	Iago. → Bian.	367	
		106	Iago. → Gent.	368	
		107	Iago. → Bian.	369	
		108-109	Iago. → Gent.	370	
		109-110	Iago. → Bian.	371	
		111-117	Emil. ↔ Iago.	372	
		118-120	Iago. ↔ Bian.	373	
		121-123	Emil. ↔ Bian.	374	
		124	Iago. → Gent.	375	
		125	Iago. → Bian.	376	
		126-127	Iago. → Emil.	377	
		128	Iago. → all.	378	
		128-129	Iago.	379	
ii		1- 85	Oth. ↔ Des.	380	The unhappy Disdemona rose from bed, and……out rushed the Ensign,
		86	Emil. → Oth.	381	……he beat her cruelly with the bag
		87- 90	Oth. → Des.	382	of sand across her back; upon which
		91- 93	Emil. ↔ Oth.	383	Disdemona fell to the ground, ……
		93-102	Oth.	384	But the Moor exclaimed, 'Thou
		102-117	Emil. ↔ Oth.	385	wickedest of women, ……' (Ensign-
		118	Des. → Oth., Emil.	386	Disdemona) (Ensign-Moor) (Moor-
		118-120	Emil. → Oth.	387	Disdemona)
		121	Emil. → Ser.	388	
		121-126	Emil. ↔ Des.	389	
		127-165	Oth. ↔ Emil.	390	
		165-166	Emil. → all.	391	
		167	Mon. → Oth.	392	
		168-169	Emil. → Iago.	393	
		170	Gra. → Emil.	394	

幕 場	行	対 話 関 係	対話関係 番号	人 物 関 係
	171-184	Emil. ←→ Iago.	395	
	185	all.	396	
	186	Emil. → Iago.	397	
	187	Oth. → masters.	398	
	188	Gra.	399	
	189	Mon.	400	
	189-193	Emil. ←→ Iago.	401	
	194-195	Emil. → Gent.	402	
	196	Emil. → Iago.	403	
	197	Oth.	404	
	197-199	Emil. ←→ Oth.	405	
	200-202	Oth. → Gra.	406	
	203-208	Gra. → Des.	407	
	209-216	Oth. → all.	408	
	216	Emil.	409	
	217-221	Iago. ←→ Emil.	410	
	221-222	Gra. → Iago.	411	
	223-227	Emil. → Oth.	412	
	227	Iago. → Emil.	413	
	228-229	Emil. → all.	414	
	229	Iago. → Emil.	415	
	230-232	Emil. → all.	416	……and all these events were narrated
	232-233	Oth. → Iago.	417	by the Ensign's wife, who was privy
	234	Gra. → all.	418	to the whole, …… (Ensign's wife-all)
	235	Emil. → Gra.	419	……he conceived so deep a hatred
	236	Gra. → all.	420	to that wicked man he could not bear
	237-241	Mon. → Gra.	421	to set eyes on him, ……he deprived
	241-244	Oth.	422	him of his rank, …… (Moor-Ensign)
	244-246	Emil. → Des.	423	The Signoria of Venice……command-
	247-249	Emil. → Oth.	424	ed that……he be brought to Venice
	250-252	Oth.	425	…… (Signoria-Moor)
	252-269	Oth. ←→ Gra.	426	
	270-274	Oth. → Des.	427	
	275-278	Oth.	428	
	279	Oth. → Des.	429	
	280-281	Lod. ←→ Oth.	430	
	282	Lod. → all.	431	

幕	場	行	対話関係	対話関係番号	人物関係
		283-284	Oth.→Iago.	432	
		285	Lod.→all.	433	
		285-287	Iago.←→Oth.	434	
		288-295	Lod.←→Oth.	435	
		296-299	Cas.←→Oth.	436	
		300-301	Iago.→Oth.	437	
		302	Lod.→Iago.	438	
		303	Gra.→Iago.	439	
		303	Oth.→Iago.	440	
		304-309	Lod.←→Oth.	441	
		309	Cas.	442	
		310-314	Lod.←→Oth.	443	
		315-325	Oth.←→Cas.	444	
		326-333	Lod.→Oth.	445	
		333	Lod.→Ser.	446	
		334-352	Oth.→Lod.	447	
		353	Lod.→all.	448	
		353	Gra.→all.	449	
		354-355	Oth.→Des.	450	
		356-357	Cas.→all.	451	
		357-360	Lod.→Iago.	452	
		360-361	Lod.	453	
		361-363	Lod.→Gra.	454	
		363-367	Lod.→Cas.	455	

注

1. Allardyce and Josephine Nicoll (ed.), *Holinshed's Chronicle as Used in Shakespeare's Plays* (Everyman's Library, 1965), Introduction. 歴史劇十編と『マクベス』、『リア王』、『シムベリン』の典拠である『年代記』の抜粋であるが、その序文に、“That study, the value of which lies in the revelation of Shakespeare's method of dramatic composition, must be undertaken by each individual student of Shakespeare. Unless the passages in Holinshed are compared carefully with Shakespeare's reworking, little understanding can be gained into the ways of his art.”とあり、これは、一般的に他の作品と典拠についても言えるであろう。又、『オセロ』と典拠の関係について John Wain は“……the relationship of this play to its source is one of the most interesting in all Shakespeare's work, and should be borne in mind continually.”と述べている。John Wain (ed.) *Othello, Casebook Series*, (The Macmillan Press Ltd., 1977), Introduction p. 31.

2. 例えば『オセロー』については Geoffrey Bullough は Source, Possible Source, Probable Source の三種類の典拠を挙げている。Cf. Geoffrey Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* (Routledge Columbia, 1973), Vol. 7, *Othello* pp. 239—265.
3. 従来の素材研究は、上記 Bullough による浩瀚な *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* 8 Vols. や、Kenneth Muir (ed.) *Shakespeare's Sources* (1965), *The Sources of Shakespeare's Plays* (1977) に見られるように、シェイクスピアの各劇作品の出典を網羅的に調査したり、様々な材源と作品との比較を批評研究的に行う場合が多い。又、Maynard Mack の指摘に見えるように、“sources”を狭義にはなく広義に解釈し、包括的相互影響関係の視点から、特定の典拠にのみ注目することを避けようとする態度もある。Cf. Maynard Mack, *King Lear in Our Time* (University of California Press, 1965), p. 49.
4. “main source”, “primary source”, “principal source”などと称されるが、劇の冒頭から結末まで終始一貫作家に作劇の材料を提供し続けるソースということになろう。
5. 拙稿「Main Source の意味——『リチャード三世』論に向けて——」『アルケミスト』1, 1970, pp. 13—17 参照。仮に、「方法論」と称すことが許されるならば、典拠と作品の比較作業は、手続きとして「方法」の説明を加えることにより、より十全なものとなろう。「方法」と「比較」は、本来一体的なものであり、結論の妥当性、非妥当性によって、「方法」の妥当性の有無が逆に量られるにすぎない。その意味で小論も「試論」の域を出ない。
6. 舞台上の人物間の台詞のやりとりを全曲的に調査し、対話番号を付した一覧表を作成。次注 7, 8, 9 参照。
7. 引用は、K. Muir (ed.), *Othello*, New Penguin Shakespeare (Penguin Books, 1968) を用いた。末尾の対話関係一覧表も、このテキストに基づく。その他、M. R. Ridley (ed.), *Othello*, The Arden Edition (Methuen Harvard, 1965) や、Alicie Walker & J. D. Wilson (ed.), *Othello*, The New Shakespeare (Cambridge University Press, 1969) を適宜参照。
8. テキストは、H. H. Furness (ed.), *Othello*, A New Variorum Edition of Shakespeare (Dover, 1963) pp. 376—389 の英訳を使用。Cinthio の『百物語』は、1566年 Venice で出版され、1584年に仏訳がパリで出版されるが、英訳は1753年まで知られていない。シェイクスピアが原語で読んだか、仏訳で読んだかは定かでないが、当時英訳か翻案があって、それが現在見つからないということかもしれない。詳しくは、前記使用テキストの序文及び H. B. Charlton, *Shakespearean Tragedy* (Cambridge University Press, 1961), pp. 114—115. 脚注等を参照。
9. この一覧表は、シェイクスピアにおける幕場毎の登場人物間の対話関係を矢印で表現し、通し番号を打ったもので、それに照応するチンティオの原話の該当箇所の人物関係を比較のために並列した。例えば一幕一場の筋書に相当する内容はチンティオにはなく、従ってその人物関係は存在しないので空欄となる。
10. Act I, II 及び Act III, IV, V の二つの部分にこの劇を分けそれぞれの部分を Cinthio と比較し、後者のグループが前者のグループよりソースに依拠する度合いが多いところから、前、後者が別々に書かれ、それも後者が先に書かれたとする意見があるが、筆者は、むしろ Act I とそれ以降、即ち Venice と Cyprus で分けることの方が、ソースとの比較に立ちオセローの悲劇の普遍的な舞台設定を行う場合本質的ではないかと考える。Cf. Ned B. Allen, “The Two Parts of ‘Othello’” (*Shakespeare Survey* 21, Cambridge University Press, 1970), pp. 13—29.
11. イアーゴの悪の動機の曖昧さについては、例えば Bernard Spivack, *Shakespeare and the Allegory of Evil* (Columbia University Press, 1958) を参照。

12. 暗闇の中でロダリーゴの音声を使ったかもしれない。
13. 1570年の事件。
14. Coleridgeの“the motive-hunting of motiveless malignity”は有名。前記注11参照。
15. *Othello*の雰囲気と背景を示すイメージとして“the sea, its images, and language”(“sea imagery”)を挙げる Spurgeon は、モンターノーらがオセローやデズデモウナの到着を心待ちに待っていると述べている。Cf. Caroline Spurgeon, *Shakespeare's Imagery* (Cambridge University Press, 1966), p. 337.
16. キプロス島は当時, “Cyprus could be seen as an outpost of Christendom, rich, vulnerable, and perilously situated: a highly suitable setting for a play showing Christian behaviour under stress.”と考えられていた。Cf. Emrys Jones, “‘*Othello*’, ‘*Lepanto*’ and the Cyprus Wars” (*Shakespeare Survey* 21, Cambridge University Press, 1970), p. 51.
17. この布告の場面について, Harley Granville-Barker は “The proclamation……helps settle the characters in Cyprus. The chances and excitements of the arrival are over. Othello is in command; but the war is over too, and he only needs bid the people rejoice at peace and his happy marriage……It “neutralizes” the action for a moment……, suspends its interest without breaking its continuity.”と言う。Cf. Harley Granville-Barker, *Prefaces to Shakespeare* 4, *Othello*, p. 19.
18. 例えば, “*Desdemona* dropt the Handkerchief, and missed it that very day after her Marriage;……”と Thomas Rymer は言う。Cf. Thomas Rymer, “*A Short View of Tragedy*” (John Wain (ed.) *Casebook Series*, The Macmillan Press Ltd., 1977), p. 45.
19. 拙稿「シェイクスピアの脇役」(『一橋論叢』第75巻第4号, 1976年4月, pp. 116—120)で結論的に考察した。
20. O. E. D., s. v. honest, a. 3. a. b. c. 例えば, William Empson, “Honest in *Othello*” (John Wain (ed.) *Casebook Series*, The Macmillan Press Ltd., 1977), pp. 98—112 参照。“honest (y)”の多義性に言及しているが, 筆者の関心は, オセローと両者の関係が同一単語で規定されているところにある。
21. Iago-Othello-Desdemona の関係の図式が, この劇の中で極めて主要な意味を持つということは, G. E. Bentley の指摘にもある通り, 又, 末尾の図表で確認できる通り, この三者に劇のアクションが集中し, II, ii を除いて全場面にこの三者のうち誰かが登場することからも窺える。Cf. G. E. Bentley (ed.), *Othello (The Pelican Shakespeare)*, Penguin Books, 1970, p. 15. Othello-Desdemona の相互的愛情の意味については例えば, Derick R. C. Marsh, *Passion Lends Them Power-A study of Shakespeare's love tragedies* (Manchester University Press, 1976), p. 98 を参照。
22. 例えば Lily B. Campbell, *Shakespeare's Tragic Heroes-Slaves of Passion* (Barnes & Noble, Inc., 1961) 中の “*Othello: A Tragedy of Jealousy*” で, Campbell は “jealousy” の語義的分析を綿密に行っているが, このオセローの性格について, “Othello is, in one sense of the word, by far the most romantic figure among Shakespeare's heroes;……”と Bradley は述べている。Cf. A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (Macmillan, 1968), p. 152.
- 〔付記〕本稿は, 昭和57年5月に, 福岡大学で開催された日本英文学会第54回大会で行った筆者の研究発表草案『オセローの悲劇——主典拠との比較において——』を書き改めたものである。